

漱石山房記念館ナゾロジー

第18号

- 特集 漱石のにじみ出る美術愛 編集者 吉田晃子…………… 2
展示報告・活動報告 …………… 4・5
漱石山房記念館所蔵資料の紹介 No.18…………… 6
 小宮豊隆 原稿「漱石二十三回忌」上中下
ミュージアムショップ …………… 7
リレーエッセイ 第15回 半藤末利子さんとの対談こぼれ話 …… 8
 朗読の会「野の花」 野間脩平
ミュージアムめぐり第9回 県立神奈川近代文学館…………… 8

漱石のにじみ出る美術愛

編集者 吉田 晃子



俳句に漢詩、謡、落語——夏目漱石が多趣味だったことはよく知られるが、美術にもおおいに関心を寄せていたことが小説から窺える。画家の名前や絵画に関する描写がさまざまな作品に登場するのだ。

「あの絵を見給へ、幹が真直で、上が傘の様に開いてターナーの画にありさうだね」と赤シャツが野だに云ふと、野だは「全くターナーですね。どうもあの曲り具合ったらありませんね。ターナーそっくりですよ」と心得顔である。ターナーとは何の事だか知らないが、聞かないでも困らない事だから黙って居た。(『坊っちゃん』より)

こちらは19世紀に活躍したイギリスの国民的画家、ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナーについて触れた一節。風景画を主戦場としたターナーには実際、ずっと高く伸びる木が印象的な作品《アヴェルヌス湖》(イェール大学英国美術センター蔵)や《チャイルド・ハロルドの巡礼》(ロンドン、テイト蔵)などがある。「幹が真直」と言う赤シャツに対して「あ

の曲り具合」と答える野だも、坊っちゃん同様にターナーを知らない様子が見てとれて、こんなところにも野だいこの太鼓持ちぶりが表れているのだ。

ロンドン留学中、漱石は大英博物館やナショナル・ギャラリー、ヴィクトリア&アルバート美術館など、当地の施設に足を運んで西洋美術に親しんでいる。現在と異なり、海外の画家の絵を国内で見られる機会はほとんどなかった時代。いかんせん、実業家の松方幸次郎のコレクションをもとに国立西洋美術館が開館したのは昭和34(1959)年なのだ。小説にイギリスの画家に関する記述が多く見られるのは、留学時代の賜物であろう。ターナーのほかにも、ジョン・エヴァレット・ミレイやジョン・ウィリアム・ウォーターハウスなど19世紀に人気を博した画家たちを動員。洋画家が主人公の『草枕』では、ミレイの《オフィリア》(ロンドン、テイト蔵)が物語の重要な役割を果たしている。

日本の作品にも目を向けてみよう。

いつかの展覧会に青木と云ふ人が海の底に立ってゐる背の高い女を描いた。代助は多くの



Profile

吉田 晃子 (よしだ・あきこ)
昭和44(1969)年、東京都生まれ。新潮社「芸術新潮」事業部総編集長。[SINRA]編集部、書籍部門、「旅」編集部を経て、2009年に「芸術新潮」編集部に異動。2014年に同誌編集長に就任、2021年より現職。

作品のうちで、あれ丈が好い気持ちに出来てゐると思つた。(『それから』より)

この絵は青木繁による《わだつみのいろこの宮》(石橋財団アーティゾン美術館蔵)である。旧居留米藩士の家に生まれた青木は東京美術学校(現・東京藝術大学)に進学し、その高い画力で画壇の寵児となるも、明治44(1911)年、肺病で28年という短い生涯を閉じた。漱石は夭折したこの画家の作品をいたく好み、没後の遺作展も鑑賞している。ちなみに《わだつみのいろこの宮》は昭和44(1969)年に国の重要文化財に指定されており、恐るべし漱石の審美眼! ほかに『草枕』では若冲、『門』では酒井抱一、『行人』では円山応挙など、日本の画家たちが物語にエッセンスを加えている。漱石の父親は絵が好きで、(小供のとき家に五六十幅の画があった。)(『思ひ出す事など』より)というから、幼少期から日本美術は身近な存在だったのだろう。

大正元(1912)年には『東京朝日新聞』で「文展と芸術」を発表。文展とは、明治40(1907)年に創設された日本初となる官営の展覧会「文部省美

術展覧会」の略称で、受賞に至ると知名度や画料が上がるなど、当時の美術界に絶大なる影響を与えていた。12回にわたって掲載された「文展と芸術」は、第6回展の展覧会評である。ジャンルは違えども同じ表現者としての叱咤激励だろうか、漱石らしい率直さで木島櫻谷の《寒月》（京都市京セラ美術館蔵）や安田靉彦の《夢殿》（東京国立博物館蔵）などには手厳しい評価。かと思えば田近竹邨の《平遠》に魅かれて購入を考えたりもしている。残念ながら（価格は五百円と断ってあった。夫で買ふのは已めた。）と断念したようだ。尾竹竹坡の《天孫降臨》に対しては、
 天孫丈あつて大變幅を取つてゐた。出来得べくんば、浅草の花屋敷か谷中の団子坂へ降臨させたいと思つた。）とユーモア炸裂。個人的な感想で恐縮ではあるが、尾竹兄弟の作品にも触れていたことが感慨深い。漱石が見たこの年の文展で三兄弟そろって入賞の榮譽に輝くも、実験的な作風や挑発的な言動もあつて、画壇と対立。すっかり忘れられていた奇才たちだが、先ごろ泉屋博古館東京で「特別展オタケ・インパクト 越堂・竹坡・国観、尾竹三兄弟の日本画アナキズム」（終了）が開催され、漱石が言及していた画家たちが再び陽の目を見た！と嬉しかった。

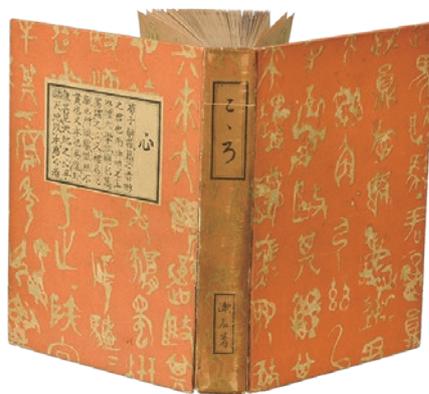
そんな漱石の美への愛情は、装丁や挿画にも表れた。デビュー作『吾輩ハ猫デアル』の表紙を飾るのは装丁を手がけた橋口五葉の作品、挿画は中村不折と浅井忠。刊行にあたって漱石は、教え子宛の手紙に（うつくしい本を出すのはうれしい。高くても売れなくてもいゝから立派にしろと云つてやつた。）と到底売れないね。）と綴っている。出版社勤めの身としては、編集者はさぞや頭を抱えたことだろうと

情する力の入れっぷりだ。もともと、同書は発売からわずか20日で初版完売。漱石は不折に挿画のおかげだと感謝の手紙を送っている。五葉は東京美術学校を卒業して間もない24歳の若者であったが、ちに森鷗外や谷崎潤一郎などの本の装丁も任されるほどになり、漱石はその才能を早くから見抜いていたと言えよう。五葉は『三四郎』や『それから』など、その後も多くの書籍で装丁を担当した。そして漱石は、『ころ』と『硝子戸の中』でとうとう自装。『道草』や未完の遺作『明暗』など最晩年の作品は津田青楓による装丁である。

その青楓に習って漱石は自ら絵筆をとることもあった。とうか立派な趣味になっていたようで、作品がいくつも残っているし、自筆の絵手紙を友人に送ったりもしている。出来栄は……味があると言葉濁したい。こちらをじつと見つめる猫が愛らしい《あかざと黒猫》（神奈川近代文学館蔵）は悪くないと思うのだが、青楓は拙さを指摘。やはり表現者同士は手厳しいのである。本人お気に入りうちの一点は《無題（寒山拾得）》（神奈川近代文学館蔵）だったようで、漱石山房の書齋に飾っていたという。



『漱石遺墨集』（岩波書店 昭和10(1935)年）より、大正3(1914)年に漱石が描いた《あかざと黒猫》。



『ころ』（岩波書店 大正3(1914)年）



『吾輩ハ猫デアル』上編（大倉書店・服部書店 明治38(1905)年）



展 示 報 告

《特別展》

『三四郎』の正体 夏目漱石と小宮豊隆

令和6年10月12日(土)～12月15日(日)

※11月11日に展示替え

夏目漱石『三四郎』のモデルともされる小宮豊隆の生誕140年を記念して、福岡県みやこ町とみやこ町教育委員会の後援を得て、特別展を開催しました。展示は第一章『三四郎』の世界、あなたはよっぽど度胸のない方ですね』第二章『三四郎』小宮豊隆 女手に育ちて星を祭りけり』第三章『漱石と豊隆 矢張り先生にして友達なるものだね。』第四章『師亡き後 今のうち修養して批評家になり玉へ。』第五章『小宮豊隆の業績 五十年生きて恥かし漱石忌』の5章構成としました。展示資料のうち、『三四郎』が上京中の車中で取り出した『ベークンズ・エッセイ』(東北大学附属図書館「漱石文庫」)等を展示し、『三四郎』の作品世界を楽しんでいただいたり、小宮を漱石に紹介した、従兄の犬塚武夫の漱石宛て書簡(「松岡・半藤家資料」)など注目資料を展示紹介しました。展示室の最後には映像コーナーを設け、みやこ町が作成した小宮豊隆の紹介映像を放映し、みやこ町の観光案内コーナーとしました。



本展示では、みやこ町歴史民俗博物館と東北大学附属図書館の多大なる御協力を得て、「小宮豊隆資料」と「漱石文庫」から貴重な資料をお借りすることが出来ました。その他の関係各位・各機関からも大変有難い御協力をいただきました。また1階から2階に上がる階段の廊下には、漫画家・香日ゆら氏のコミックエッセイ「漱石門下の小宮豊隆」(小宮豊隆「漱石先生と私たち」所収)のパネルを展示したり、館内にフォトスポットを設け、『三四郎』のセリフを使ったフォトプロップスコナーを作るなど、展示以外でも親しめる工夫を試みました。

来館者からは、「贈られた絵やハガキや手紙のやりとり、本で知っていても、資料で見ると実感がわいてきますね。」「今後もユニークな弟子の展示を楽しみにしています」などのご意見をいただきました。

活 動 報 告

イベント報告

開館記念講演会
「高浜虚子生誕150年
虚子・漱石から近代俳句」

令和6年9月21日(土)



漱石山房記念館開館7周年を記念して、開館記念講演会を開催しました。今回の講師は、高浜虚子の曾孫である俳人の星野高士氏に依頼し、漱石・虚子の俳句の紹介、作られた背景や言葉の使い方、作人らしい切り口で紹介いただきました。参加者からは、「もっと話が聞きたかった」など好評を得ました。

漱石アンドロイドによる
『三四郎』朗読会

令和6年10月19日(土)

通常、二松学舎大学で活動している「漱石アンドロイド」。開催中だった特別展に合わせて、当館で『三四郎』の朗読や、漱石アンドロイド研究会の学生と共にO×クイズなどを行いました。アンドロイド研究に関する貴重な話もあり、アンドロイドの漱石先生と過ごす濃い時間となった本朗読会、最後は記念撮影で締めくくりました。



漱石山房トークショー
「漱石先生と小宮豊隆」

令和6年11月3日(日祝)

特別展に合わせ、夏目漱石やその門下生などを取り上げたコミック作品等を手掛ける、漫画家の香日ゆら氏と当館学芸員によるトークショーを開催しました。「漱石が大好き!」という視点からお話を伺い、後半は香日氏への質問コーナーで参加者からの質問に答えていただきました。参加者より「カジュアルな雰囲気でも楽しかった」等の感想がありました。



特別展記念講演会
「小宮豊隆という多面体」

令和6年11月23日(土祝)

《特別展》『三四郎』の正体 夏目漱石と小宮豊隆」にちなんで東北大学大学院准教授の仁平政人氏による記念講演会でした。漱石門下生の筆頭という小宮豊隆の立場だけではなく、小説家としての顔、文芸批評家としての顔、古典文学・伝統文化の研究者としての顔等、特別展とは異なる切り口で小宮豊隆という人物を解き明かしていただきました。参加者からは「聞いていて楽しいご研



開催中

《通常展》

夏目漱石と漱石山房 其の一

令和6年12月19日(木)～令和7年4月20日(日)

※2月18日展示替え

漱石山房記念館では、これまで多くの方からの寄贈や夏目漱石記念施設整備基金への寄附により貴重な資料を収蔵することができました。本展示では、そうした皆様の協力によって収集された漱石山房記念館の代表的な資料を紹介しています。漱石山房記念館資料の核となる「松岡・半藤家資料」や、近年新たに収蔵された資料を中心に、夏目漱石と漱石山房をたどっています。

今回は、漱石の思想に大きな影響を与えた哲学者・ラファエル・フォン・ケーベルが帰国時（実際には帰国できなかった）に漱石に託した教え子たちへの告別の辞を、漱石が自身の回想録を交えて『東京朝日新聞』に掲載した原稿「ケーベル先生の告別」や、『道草』『明暗』の装丁を手がけ絵画の師であった津田青楓に宛てて芸術家の孤独について語った書簡などを展示しています。

漱石が亡くなるまでの9年間を過ごした漱石山房の地で、ゆかりの資料を通じて漱石の生涯や作品世界に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。是非お越し下さい。



究、理論の組み立てに目が醒める思いです。漱石の芭蕉、ゲーテがこうしてつながるとは……」などの感想をいただきました。

文学館学芸員講座
「文京区立森鷗外記念館の成り立ちと所蔵資料の軌跡について」

令和6年11月30日(土)

文学館学芸員による現場からの最先端の講義でした。今年には文京区立森鷗外記念館の副館長兼学芸員・塚田瑞穂氏に、森鷗外記念館の歴史や鷗外旧蔵書の所蔵先、これまで開催された展示、鷗外と漱石の接点などについてお話いただきました。

受講者からは「展示のコンセプトの話が面白かった」「学芸員の仕事は垣間見られて興味深かった」などの感想をいただきました。



俳句講座
「漱石と虚子―余裕の文学―」

令和6年12月7日(土)

俳人で、現在、日経新聞の俳壇欄の選者も務められている神野紗希氏を講師にお招きしました。俳句講座を開催しました。漱石初の小説「吾輩は猫である」の誕生に深く関わって



たことでも知られる高浜虚子と漱石についての講演の後、漱石も楽しんだ互選句会を実際に体験していただきました。参加者からは「はじめは句会と聞いて緊張していましたが、大変のびのびとして楽しい句会でした」「貴重なお話と作句、良い企画だと思います。今後継続してほしいと思います」などの感想をいただきました。

文学さんぽ
漱石忌 夏目漱石の墓参り

令和6年12月8日(日)

漱石山房記念館では毎年、漱石の忌日12月9日に合わせて、雑司ヶ谷霊園の漱石と漱石ゆかりの人物のお墓を訪ねる文学さんぽを実施しています。今年には漱石忌の前日に行い、漱石に加えて、岩野泡鳴、森田草平、ラファエル・フォン・ケーベルのお墓を巡り、ボランティアガイドが熱のこもった解説を行いました。参加者からは「個人ではなかなか行かないので、とても貴重な体験となりよかったです」「年を重ねてからお参りするといろんな想いもわきとでもよかったです」などの感想をいただきました。



漱石山房記念館

所蔵資料の紹介

小宮豊隆 原稿

「漱石二十三回忌」上中下

昭和13(1938)年12月23日

No.18



夏目漱石の門下生の筆頭的立場にあった小宮豊隆の直筆原稿です。『東京朝日新聞』昭和13(1938)年12月24日・25日・26日に掲載されました。

本資料は、「岩波特製」原稿用紙24枚に書かれています。文字の大きさや改行を指示する校正記号が記されているところから入稿原稿であることがわかります。実は、この4年後に岩波書店から刊行された小宮のエッセイ集『漱石・寅彦・三重吉』に収録されたので、このときのものかとも思いましたが、用紙上部余白に「13.12.22.卯430」というおそらくは編集部での作業日時を示すスタンプ印があるので、朝日新聞への入稿原稿でしょう。上中下の各編に「小宮豊隆」という署名もあるのでそのように思われます。

さて、漱石の二十三回忌は、昭和13(1938)年12月9日に茗荷谷にあった至道庵で営まれました。この日は、冬晴れの麗らかな小春日和だったといえます。小宮のエッセイによれば、漱石はこういう日には必ず書斎から「縁側」(ベランダ)へ紫檀製の文机を持ち出して、読書をしたり、原稿の執筆をしたりしたといえます。小宮はこのような漱石を見る度、漱石の俳句「日當りや熟柿の如き心地あり」を思い出したと語ります。

この日の夜、上野・精養軒に会場を移し、漱石の写

真を安置した祭壇が設けられ、鏡子夫人によって食事会が設けられました。出席した門下生たちは一人ずつ立ち上がって、漱石の思い出を一鎖ずつ話しました。小宮は、漱石に電話をかけてひどく怒られた思い出話を披露しています。

法事の後には、これまでだと漱石の書斎と蔵書をどのように保存するのかという話し合いがなされるのが恒例でした。

然し今年はその問題は出なかった。私もそれを出さなかった。

早稲田の漱石の書斎は、夏目家が西大久保に転居した後もそのままに残されましたが、書斎と客間以外はすっかり改築されました。また、管理人はいるものの、閉め切っているため、風通しが悪く、鼠などが走り回り、本が傷んで仕方無いと小宮は嘆きます。

本来であれば、夏目家で現在の家を取り壊し、全て原型に戻した上で然るべきところに寄附をし、保管に当たってもらうのが一番良い方法だと述べます。しかし、現実には様々な事情から実現の見込みは無い。したがって、この問題が当分解決される見込みが無いのなら、せめて蔵書だけでも先にどうにかしたいという問題が生じると述べます。

蔵書を取り去ったら、先生の書斎は歯の抜けたようなものになってしまはなければならない。その点から言えば、蔵書の処分という事は、先生の家、もしくは書斎を保存する方法が、どうしても立たない場合になって、初めて考えべき問題で、こっちは先に考えるのは、寧ろ本末顛倒と言われるべき事であるのかも知れない。――

事実としては、空襲によって書斎が全焼する直前の昭和18(1943)年、小宮らの努力により、漱石の

蔵書は東北大学附属図書館へ移管されました。

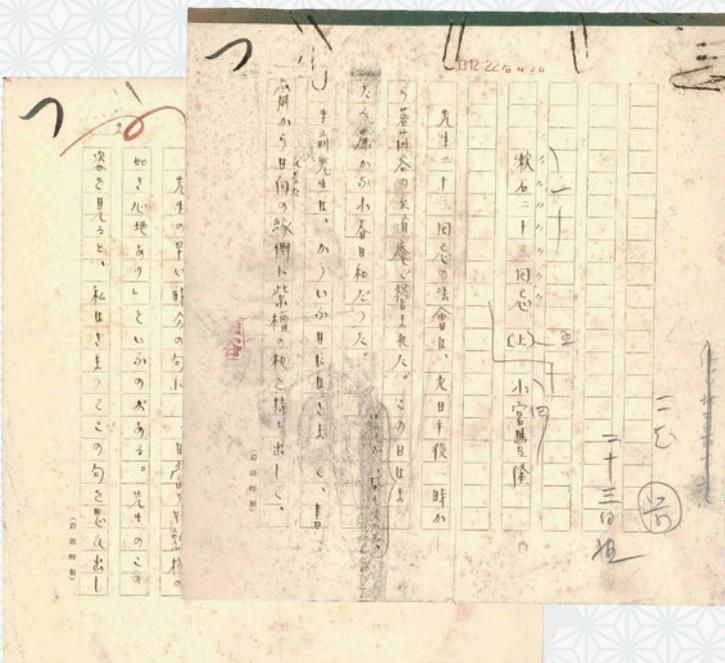
年をとった門下生たちが漱石の思い出を語り合う様子、そして小宮が抱えていた漱石山房保存に対する思い。当館にとって誠に意義深い資料ということが出来ます。

「漱石二十三回忌」は、再録時の『漱石・寅彦・三重吉』の文末に「一三、一二、二三」との日付(校了日か)が付されています。そして昨年、刊行された小宮豊隆著『漱石先生と私たち』(中公文庫)にも収録されたので容易に読むことが出来ます。

本資料は、夏目漱石記念施設整備基金を活用し、『特別展』「三四郎」の正体 小宮豊隆と夏目漱石」において展示しました。

※引用文は、本原稿を底本としています。

(漱石山房記念館学芸員 今野慶信)



漱石山房記念館 オリジナルグッズの紹介

新商品 初版本マグネット 価格：各 300 円（縦 4cm×横 4cm）

昨夏の《通常展》テーマ展示「漱石山房記念館初版本コレクション」で人気の高かった初版本をマグネットにしました。タイルのようにかわいい仕上がりになりました。



『吾輩は猫である』上編



『吾輩は猫である』下編



『虞美人草』



『それから』



『四篇』



『彼岸過迄』



『こころ』



『吾輩は猫である』下編中表紙



『行人』中表紙



『行人』見返し

復活

ミニトートバッグ「吾輩ハ猫デアル」

価格：1,000 円
（縦約 20cm × 横約 30cm × マチ約 10cm）

この度ご要望の多かったミニトート「吾輩ハ猫デアル」を再作成しました。

帆布の風合いを活かした生成りの生地に、『吾輩ハ猫デアル』上編初版本の装丁から選んだ猫のデザインが鮮やかなオレンジ色でプリントされていて、目を引きま。

小さめサイズがちょっとしたお出かけやランチバッグとしても大変便利です。



※価格はすべて税込です

〈問合せ〉新宿区立漱石山房記念館 ミュージアムショップ担当

電話：03-3205-0209 FAX：03-3205-0211
詳細はミュージアムショップのウェブページをご確認ください。
<https://soseki-museum.jp/user-guide/museum-shop/>



※当館オリジナルグッズは郵送でもご購入いただけます。

1984年に開館し、2024年には40周年を迎えた日本近代文学専門の博物館・図書館です。神奈川県は夏目漱石をはじめ、芥川龍之介、川端康成、太宰治、三島由紀夫など、日本近代文学史を代表する作家たちと深い関わりがあり、多くの文学作品の舞台となってきました。これらの作家や作品の魅力、展示会や講演会、朗読会などを通じて広く発信しています。



©TakeshiYAMAGISHI

所蔵資料は神奈川県ゆかりの文学を中心に収集、保存、公開しており、130万点を超過しています。中でも「夏目漱石特別コレクション」は国内でも有数の規模と質を誇り、現在は「夏目漱石資料デジタルアーカイブ」としてインターネット上で公開しています。原稿や自筆資料、書簡、書画、遺品などを、鮮明なデジタル画像で誰でも閲覧することができます。また、展示館第1展示室の「漱石山房書齋」コーナーでは、書齋の雰囲気、コレクションの一部を紹介しています。

館内には「鮎喫茶すすす」を併設。文学をテーマにしたお寿司やドリンク、スイーツを楽しめる場所として、来館者に親しまれています。

県立神奈川近代文学館

住所 神奈川県横浜市中区山手町 110
TEL 045-622-6666
入館料 観覧料 観覧券ごとに異なる
開館時間 展示室▶ 9:30～17:00(入館は16:30まで)
観覧室▶ 9:30～18:30(土・日・祝日は17:00まで)
休館日 月曜日(祝日は開館)、年末年始ほか
※詳しくはウェブサイトをご確認ください <https://www.kanabun.or.jp/>



お知らせ

現在開催中の展示

《通常展》夏目漱石と漱石山房 其の二

会期 開催中～4月20日(日)

寄贈や基金への寄附により収集した資料、そして「松岡・半藤家資料」から夏目漱石と漱石山房をたどります。



特集は「芸術新潮」事業部総編集長の吉田晃子さん、リレーエッセイは朗読の会「野の花」野間脩平さんにご寄稿いただきました。ありがとうございます。ミュージアムめぐりの県立神奈川近代文学館は、当館の開館に際し、常設展示では資料の写真、漱石山房再現展示室ではレプリカ作成の資料など多くのご協力をいただいています。また、県立神奈川近代文学館ではミュージアムグッズも多く販売されていて、当館でも漱石に関するグッズを取り扱っています。

今年は「吾輩は猫である」発表120年、当館は「猫年」として様々なイベントなどを行っていきたくと思っています。

引き続き新宿区立漱石山房記念館をよろしくお祈りいたします。

表紙のこぼれ話

「虞美人草」で印象深い上野の東京勧業博覧会の風景。当時の白黒の写真を参考に、煌びやかな博覧会の夜景を想像して色をつけました。当時夢のように美しく人々の心に映ったのではないのでしょうか。(中川学)



Access

【電車】 東京メトロ東西線「早稲田駅」1番出口より徒歩10分
都営地下鉄大江戸線「牛込柳町駅」東口より徒歩15分

【バス】 都営バス(白61)「牛込保健センター前」より徒歩2分
※駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。

- 所在地…東京都新宿区早稲田南町7番地
- 休館日…毎週月曜日(祝休日の場合は翌平日)、年末年始(12/29～1/3)、展示替期間
- 開館時間…10:00～18:00(ただし入館は17:30まで)
- 観覧料…一般300円、小中学生100円、特別展開催時は別途定めます

新宿区立漱石山房記念館

TEL: 03-3205-0209 FAX: 03-3205-0211 <https://soseki-museum.jp/>
編集・発行 新宿区立漱石山房記念館(指定管理者:公益財団法人新宿未来創造財団)
表紙イラストレーション: 中川学



リレーエッセイ 第15回

半藤末利子さんとの対談こぼれ話

朗読の会 野の花 野間脩平

私たちの朗読グループ「沙羅の木」「野の花」が、漱石山房記念館で朗読発表会を始めた頃の令和4年9月24日に漱石山房記念館は、開館5周年を迎えました。夏目漱石先生・生誕155年にあたる年でした。漱石先生の孫にあたる名誉館長半藤末利子さんに、祖母の鏡子夫人、母の筆子さんから直接聞かされた、祖父・夏目金之助の素顔についてお話を聞くという企画が持ち上がり、半藤末利子さんの希望で対談という形になりました。その5年前、名誉館長は生誕150年の時にもフリーアナウンサーの宮本隆治氏と対談し、その心地良い聞き上手ぶりを覚えておられ、今回も対談形式を希望されました。記念館での朗読会でお世話になっていた、元フジテレビアナウンサーの私にお鉢が回ってきたのです。

テーマの中心は「夏目家三代の夫婦像」。肩肘を張らない楽しいお話でした。「明治28(1895)年の暮れ、当時28歳の松山中学の英語教師夏目金之助は、見合いのために帰京し、貴族院書記官長の中根重一の長女鏡子と会うために一人で書記官長の宿舎へ出かけて行ったと言います。そして、既に写真の交換も済み互いに気に入った模様であったようです。また、母筆子の場合は、多くの求愛者の中から、漱石門下の中でも無口で年若い松岡謙を筆子が熱望した末の大恋愛だった」と話されました。そして半藤末利子さんの場合「私は、望まれて嫁に参りました」と仰る。三代三様の夫婦像であったようです。

また「読者の皆さんは本を読んで「漱石」はすごく偉い人で完全無欠の様な印象を受けて居られますが、母筆子のごく身近な人は非常に怖かったと申します。でも祖母の鏡子は、漱石の写真を見た途端「なんて素敵な品の良い紳士でしょう」と一目惚れしたのです」こんなお話を実に楽しそうにコロコロと笑いながらいただきました。

歴史上の大文豪で偉大な遠い存在であった「夏目漱石先生」が門下生や教え子たち、周囲の人たちに愛情深く、実に人間らしいエピソードに溢れた優しい方だったと、とても身近に感じられた「愉しい」時間でした。(完)

Profile

野間脩平(のましゅうへい)



元フジテレビアナウンス室長。在職中はニュースからワイドショーまで広く担当。時代劇専門チャンネルで、「朗読 鬼平犯科帳」を8年間担当。現在は、叡森光子芸能文化振興財団代表理事。朗読の会「銀座寺子屋」主宰。